おばあちゃんの家

中山円

ある夏休みのお話。

女の子の名前はさくらちゃん。

さくらちゃんはおばあちゃんの家が大っ嫌いだった。理由は台所以外全部たたみの部屋だったり、ろう下や縁側の床がギシギシ鳴って怖いし、急な階段の手すりがと中で折れていて、おりるときにすごく怖かったからだ。お父さんは「気にするな。」と言うけど、さくらちゃんは「嫌だなぁ」と思っていたから、夏休みにおばあちゃんの家には行きたくなかった。でもおばあちゃんのことは大好きだったから仕方なくおばあちゃん家に行った。そうしたらその年の夏休みはいつもと違って、なぜかおばあちゃんの家にとまることになってしまった。

夜になって寝ているときに変な夢をみた。井戸の前に自分がいて、ふたを自分が開ける。そして水をバケツにくむ。その後知らない所のがれきの上を歩く。そこで目が覚めて、それが何だったのかわからなかった。

次の日も同じ夢をみて、同じところで目が覚めて、さくらちゃんは不思ぎに思いつつもその日も眠った。

その日は暗やみの中、たった一人でいるものすごくさびしい夢。そして「なんだ夢か・・」と目が覚めて、それから起こしにきたお母さんをふと見ると顔がない。そこでも目が覚め、また夢かと安心すると上から急に物がふってきてぶつかる直前でまた目が覚めて、また覚めて、また覚めて、何回めかと思い時計を見てもいつかと同じ時こく、どうしていいかわからなくなってふとんの中にもぐってやっと眠れたと思ったらお母さんに起こされる。顔のないお母さんが呼ぶ名前が聞こえない。

ついにさくらちゃんは自分の名前を忘れてしまって、どこまでがげん実でどこまでが夢かわからないまま何かにとじこめられたのだった。

そうしてさくらちゃんはやっとゆっくり眠れた・・・。